

くする事は武士を土着するにあり、武士土着して人多き時は、壘も居館も保ち易くして、國家の助少しとせず、此心持を孔子も足食足兵と宣ひ、又庶富教とも説及べり、將たる人能く思ふべし。

附總て城中には箆竹を多く植置べし、矢の料に用ふべき爲めなり、尤も弓、銃工、鍛治等を足輕の兼役に仕込置て用を足す事は段々言へし如くなり、能く心を配るへし。

第十卷終

海國兵談 第十一卷

城攻竝攻具

城を攻る事は止む事を得ずして攻むるなり、其謂れは元來城と言ふものは、地形に便り堀塀を設け、遠き敵をば弓、鐵砲等の飛道具にて打拂ひ、近き敵をば鎗、長刀等の短兵にて切伏んと堅固に構へたる所へ、外より仕懸て其城を乗り取らんとする故、人數も多く損傷し、又國內の人民も苦しむ事なり、此故に城攻をば爲さる覺悟なれども、敵要害を固め、根本を堅くして、暴亂を遅くするをば捨置事も仕難き事なれば、止む事を得ずして攻るなり、倍攻る時に至つては、其術に巧拙あり、能く吞込まざる時は、人數を損するのみならず、却て害を引出す事あり、將たる人詳に會得あるべし。城を攻る事は敵より五六倍の人數に非ざれば、攻められざる事なり、然りと雖も時宜に依つて小勢にて不意に攻懸り、或は鷹野などに事寄て徒膚攻等をも仕懸け又は夜討等を仕懸て城を抜く事あれども、皆臨時の權變にして定法にはあらざるなり、攻むると攻めらるるとは、攻めらるる者は小勢なれども、己か國なれば案内も能

く呑込み兵糧水薪の便利もよく後詰の頼もあるなり、攻むる方は大勢なれども他國の事なれば萬事不案内にして諸方不便利なり、尤兵糧の續かざる事もあり、又長き間には流言等を得て味方割のする事なども出来て、騷動を生ずるもあり、彼是以て不便利の事多し、且又籠城する者は必死の心に極る故、人の心氣も一齋なり、攻むる方は大勢なる故何時も城兵を侮り驕りて油斷も出来るものなり、兎角城を攻むるには籠城の思ひ入れを呑込み、籠城するには、攻手の思を呑込む時は、守攻共に拙き事あるべからず。

上にも言ふ如く城を圍む事は敵より十倍も多き人数にて取懸る事なれば、隙なく圍まざる事なれども、態と一方をば明け置く事城を圍む習なり、四方隙なく圍む時は死地に陥る爲、城中一致して必死を覺悟して守る故、落つべき城も落兼る事あり、此故に一方を圍まずして城中の氣緩む時は人散して城落ち易し。

是は敵將を日に懸けず、只城を奪ひ、地を略するを專一とする時の攻方なり、又敵將を討ざれば勝ち難き合戦の時、此城中に敵將の在るを慥に知得たる時などは、四方一寸の隙もなく取圍て、城兵を丸呑になし、城中を塵にして根を斷ち、葉を枯らす事もあるべし、單子か漢の高祖を白登城に取圍みしも此趣意なり、然れども

單子無智なる故陳平に欺かれ、高祖を取逃したり、思ふべし。

城を攻むるに數多の心得あり、敵弱く糧米も不足にて、後詰の氣遣もなき城ならば、打圍て兵威を示し、絶へず小持合して城を疲し、已を全くして、夜討等に逢ざる様に用心して、久敷圍む時は力を費さずして城落ると言へり。

敵強く糧米も多く、後詰も来るべき城ならば、短兵急に攻懸るべし、遅々すれば内外より、狭み討たれて大に難を受くる事あり、此故に急に落城有間敷見詰る時は、速に圍を拂て退く事もあり、時宜の權謀に因るべし。

山城等は表通りのみ、普請を丈夫に構て、後に山を恃て普請を加へざるもあり、其様子ならば前より手酷く攻懸り別に人数を後の山へ廻し、笠より落して破る事あるべし。右の外城により、時により敵により勢の多少にも因て、種々の攻方あるべし、筆紙に盡し難き所なり、多く軍記を讀て自ら極所に至るべし。

城中の計策にて寄手に日數を送らすべき爲に、種々の方略を施す事あるべし、明に察して取計るべし。

敵地へ踏込時は、村里の人民、軍兵の亂暴を患て、家財妻子を引纏め、逃隠して且恐れ且恨むものなり、然る故に敵地へ踏込みては、軍兵の亂暴を嚴に禁し、國民へ指も差

させぬ様にする事なり、倭人民等逃隠したれば、所々に高札を立て、厳しく軍兵の亂暴、不作法を禁じたり、早々立歸て住居せよと言ふ趣を書付くへし、若し違背して亂暴する者あらば、立所に斬つて其所に梟首し、其地の人民に安堵なさしむべし、如此なれば敵國の住民信服して思付なり、清正此所を呑込みたる故、朝鮮の土民親附して軍士と親しく交はりし故、清正の軍士は陣用に事缺く事なかりしと聞及べり、清正の軍法尊ふべし。

城を圍まんとする時は、先づ後誥の來るべき道筋を考て、別備を設け、押への入數を置て、其後城を取盡すべし。

城攻の時向ひ城を二三ヶ所にも取事あり、其普請は馬防きの堀虎落を拵へて事足るなり、随分便利に敏く取るべし。

城近く押誥ては必油斷する事勿れ、蟄^{ツバメ}際の一戦とて名殘の一と軍して引籠る敵あり、此一戦は寄手を散らすか、己れ追込らるるか、と運定め、の軍なれば一段手ひごきものと言へり、心得あるべし。

城近く陣を張には城と陣との間に森林等あらば其陰に陣すべし、城より直に見渡す所は大筒の氣遣あり。

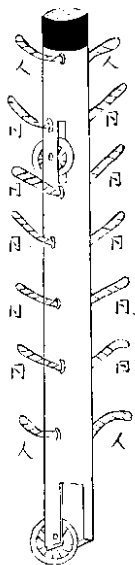
城と陣との間は定法なしと雖も、近きは五六町遠きは十四五町なるべし、尤敵城に近附て陣する時は、繁く物見を置て、敵城の様子等を注進せしむべし。

城攻の法當時諸軍家の傳授にも、攻具殊の外足らざるなり、堅固なる城程、攻具拙くては拔難き事なれば、傳授受けたる攻具の外にも、猶書籍を考見て、了簡の上、城地の高阜又は普請の巧拙等に因て、新に製作あるべきは、良將の器と言ふべし。

城攻は門を破るか、塀を倒すか、石垣を掘崩すかに非されは、破れ口附かざるものなり、此故に先づ此三所を破る工夫をなすべし、然し乍ら門塀を破り、石垣を崩すにも寄附かされは叶はざる事なり、此故に先づ仕寄道具を製作する事、第一の事なりと知るべし。

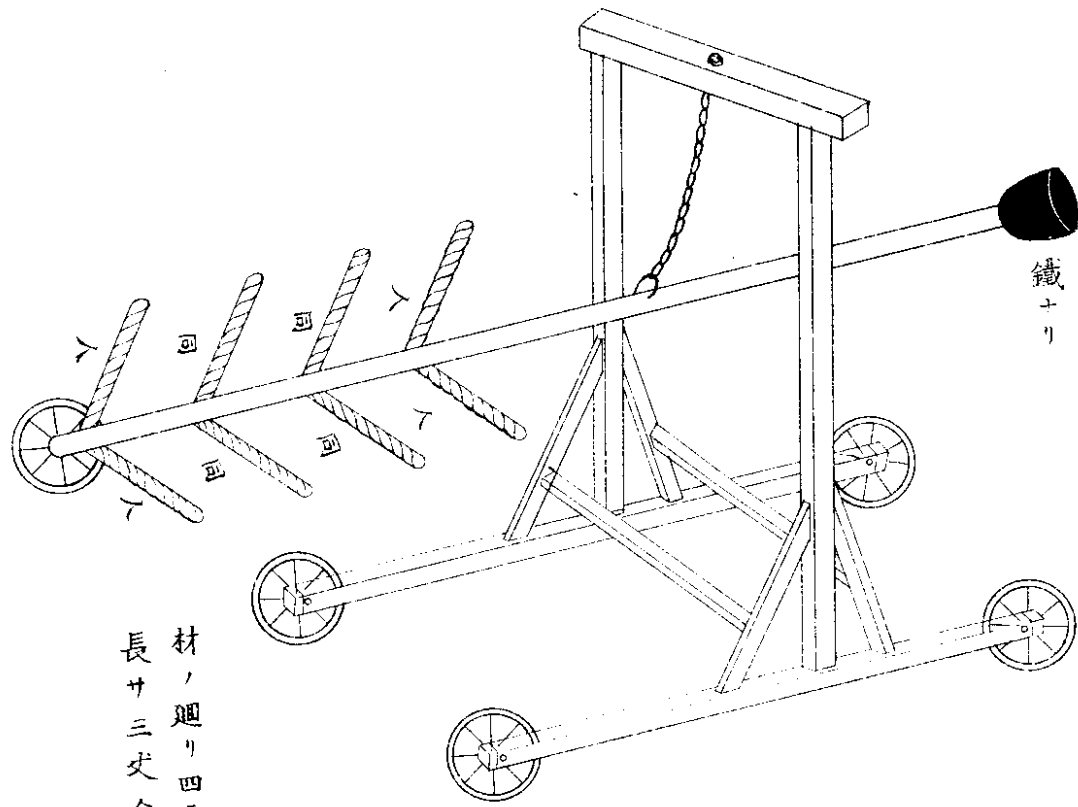
仕寄道具は厚板にて箱を拵へ、車を仕付て、此箱の中へ人を込て仕寄るあり、又一等精きは右の箱の外面を生牛皮、生野猪皮にて張固めて用ふるあり、又大楯に車を仕付て、十四五人一齊に堆寄るあり、持楯にて押寄すあり、竹束にて仕寄るあり、又阿蘭陀流に破楯^{カブリ}あり、生牛皮にて持楯の如くに拵へ、仕寄る時は腰を屈めて是を背上に被り、首より尻迄覆て、數百人連續して手に手を取組て城へ寄付る事あり、此等の器械猶工夫の上製作あるべし、城門を破るには廻り三四尺長さ三丈許の大材の頭を、

鐵にて張固め彼の大材へ車二ヶ所仕付け、大材の左右數ヶ所に綱を附け、五十人にて此木を牽き、城門へ押向て一齊力に突懸て打破るなり、尤此木を牽く武夫は人毎に持楯を持って、矢石を防ぎながら仕寄べし、楯門を打破るに於ては材も、楯も打棄て、無二無三に城内へ切込むへし、是を大切とす重賞あり。



又阿蘭陀流に城門の際或は石垣の角の所へ鳥居形を仕立て此鳥居へ大材を釣り、其大材の端地に引く所に車を仕附て走りを能くし、鐘撞仕懸けの如くして扉を打碎き又は石垣の角石を突抜事あり、總して此類の製作猶工夫あるべし。柴、薪を門の際に積重ねて火を懸け、城門を焼破る事あるべし、又捧火、矢數火、矢亂火等を以て焼破る事あり、其法は第一卷目、焼討の所に委し。

鳥居撞之圖



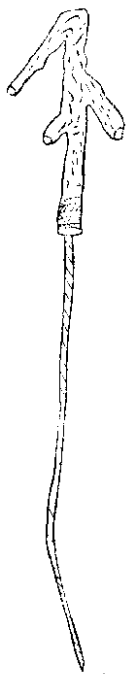
鐵子

材ノ廻リ四五尺
長サ三丈余

城を攻むるには先堀を埋むべし、埋草の在家を毀ち、又は柴、糞、藪の類を用ふるなり、又土俵夥しく拵へ、數千、萬人に一俵宛持せて火急に打込て埋る事もあり、總て埋草の打込様は亂散に打込む事勿れ、一所へ纏て打込み道に成る様すへし。

堀を破るには切破る事あり、熊手、鎌等を引懸て引倒す事あり、大槌にて打破るあり、又緩き時は柱を三四本土際より挽切て引くか推すかせば倒るなり、又細引の先に三又、四又の木枝を結び附て百條も二百筋も打懸て一齊に引けば引倒すと云へり。

又木之圖

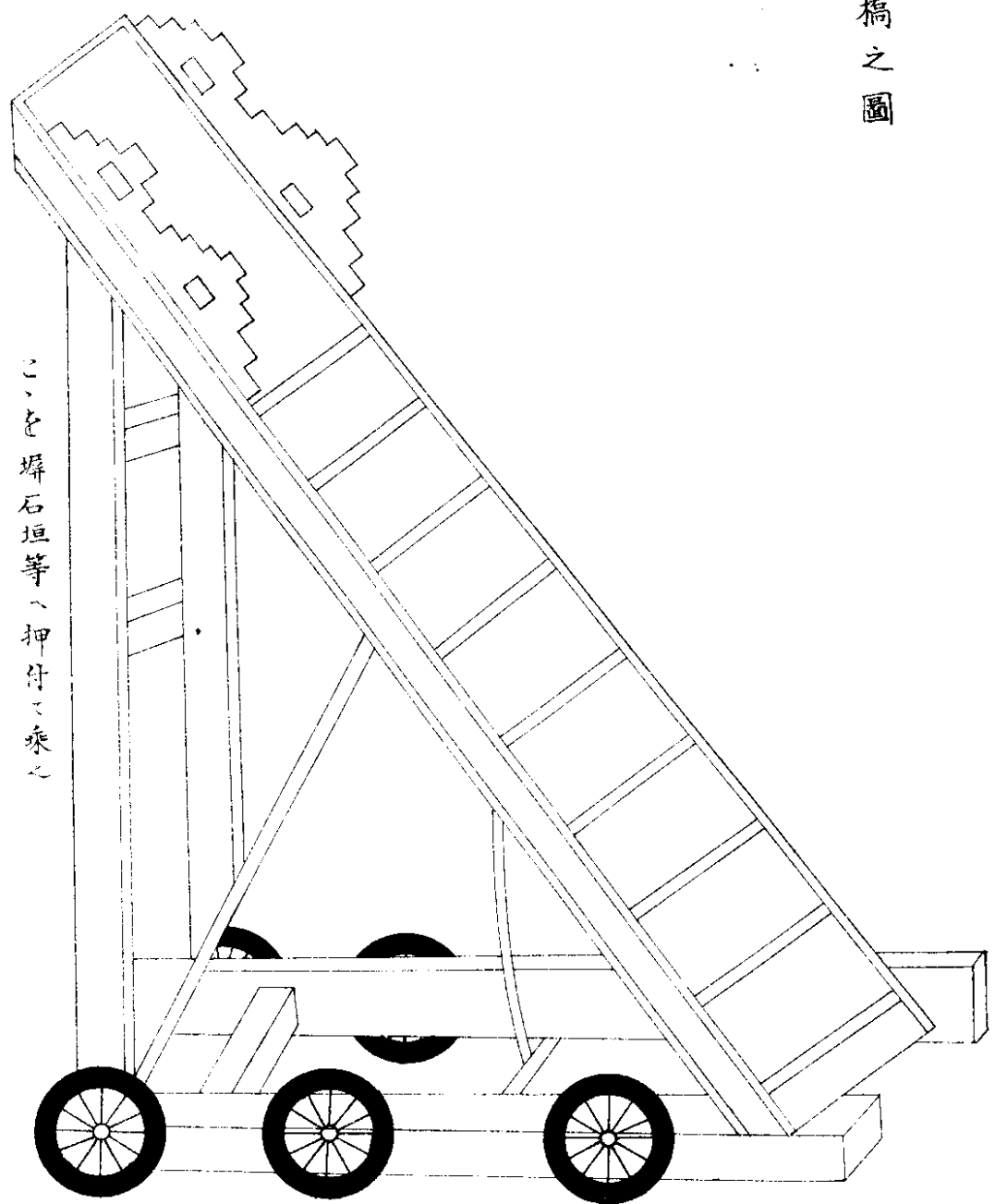


城を乗には階子にて乗るあり、手を懸て乗るあり、行天橋と云ふ物にて乗るあり、此外楯に横木を打附て階子の代りに用ふるもあり、又一本の材木に刻を附て、堀に倒し懸て乗もあり、各様々なり、大佛定直、千劍、破城を破る時、二十余丈の梯を造て切岸へ打懸たるをもあり考ふへし、グレイキス、ブツクに守攻の具甚精詳なり、見合せて製作あるべし。


石垣を崩すには仕寄道具にて寄付、鐵手子又は鶴嘴にて崩すべし、隅石を一つ二つ

掘抜けば餘は崩れ易きものなり、清正此働に得手たり、又上に出せる鳥居撞にて崩すへし。

行天橋之圖



こゝを塙石垣等へ押付て乘之

櫓或は堀等を崩すに化粧棚と言ふ物を込め乍ら掘入る事あり、其形  如此右の木を數多拵へ、掘入るに隨て段々込乍ら思ふ所迄掘込て、偕穴の内に薪、萱の類を累ねて火を懸れば化粧棚焼折て穴崩る故、櫓も扉も打倒ると言へり。

火攻は大風の時風上より在家々々へ火を懸て、其火氣にて城を焼くなり、若又在家無き時は竹木を山と積上て火を放すべし、

水攻と言ふに二つあり一つは木無き山城等にては、城下より水を引て用ふる事あり、其水源を斷ち切り、城中に一滴の水も無き様にして、攻むる時は、涸渴に苦て落城に及ぶ事あり、一は水吐き悪き城地をば卑き方へ長堤を築て、高き方より水を注ぎ懸れば城地水に浸りて落城する事あり、太閤この術を致されたり、但し堤と城との高底は術を以能く計るへし、若堤卑くして水を注ても城を浸さざる時は勞して功なきのみならず、千古の笑となるべし。

右の外攻具、攻様幾許もあるべし、時に臨て製作すべし、攻具の制作も新規に致されざる程の拙さにては、所詮果敢々々敷軍はなる間じきなり、偕右の外に城攻に心得べき事ともあり左に記す。

城攻は鐵砲を連放し、只太鼓等を鳴らし、一齊に攻懸る躰を見せ、又諸方の攻口へ人

數を向て絶えず取合せ、又は忍を入れて城中を騒動させ、又は火矢、大筒等を打懸て肝を冷させ等して、新しき手を入替々々晝夜三日も悩ます時は、城中大に疲るる者なり、其潮合を能く見定て總懸にして手ひごく攻むる時は、利ありと知るべし、但し如此攻むる時は、人數を數百手に別て役定をなして働くべし。

城中より和睦、降參等を望む時は、能く眞偽を察し、事情を確めて了簡を廻し、取扱ふべし、後詰の來る迄、口數を送るべき爲に如此計るあり、又油斷させて不意を討つべきため、如此計るもあり、能々察すべし。

敵將城を出ておめく、と降參するもあるべし、眞の降を殺は不明なり、偽の降を助るも又不明なり、初にも言へる如く、降人の甲冑又は時勢等を能く考計て、取扱ふべし、是を明察と云ふ。

城中の大將分、腹切て殘る人數を助け度と望も在るべし、城を渡して、明除き度と望むもあるべし、是又能く察して、落度なき様に取計ふべし。

兎にも角にも、此城を枕として討死と覺悟を極むるものあるべし、又た強て突て出る敵もあるべし、後詰を待つ敵もあるべし、能く敵の模様カクキと事情とを察して、取扱ふべし、城を落しては、城中の人を憐て、軍兵の亂暴、不作法等をさひしく禁して、安堵な

さしむべし、又は時宜に依て、城中の人をば悉く出して、味方の列に入れ、城へは別に武功の者に、人數を添て、入置事もあるべし。

降を請ふ者には、或は領地を取揚て、命計を助くるもあるべし、又は半地又は本領安堵の約束等、時宜に依るべし。

大に猛威を振ひ、近國を震動する時は、大祿の物は所領を失ふべき事を恐れ、小祿の者は、塵に成るべき事を恐れて、必死に思ひ、諸降參も致さざるものなり、斯様の時に、城城、館々を悉く屠り落さんとする時は、口數も懸り、人數も損するものなり、此故に、軍略者は、其張本人さへ仕伏たる上は、自餘の者は、命は言ふに及ばず、所領ともに、唯今迄の如く成すべし、安堵致し、早々罷り出て、大將に謁すべしと、所々に高札を立て、寛仁の腹中を示すべし。

右城攻の大略なり、猶古蹤を考へ見へし。